

具体的な事業内容

- ① アドバンスドプレイズメントを高大連携高校に呼びかけ、春学期・秋学期開講科目の高校生の履修、単位認定を実施し、単位認定に協力する連携大学を増やしていく。  
ライティングセンターの運営により、本学学生ならびに連携高等学校生徒を対象に、集中的に英語・中国語のライティングスキルを涵養する。留学時に要求されるライティング能力を養成するとともに、留学資料の準備等におけるサポートも行う。
- ② 各種広報媒体を充実させ、タイムリーな情報を発信することにより、本事業の周知ならびに持続的実施の基盤を構築する。広報を担当する幹事校に対し積極的に協力していく。
- ③ 大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会、高大接続推進室、ライティングセンターとの連動を継続し、他学部への事業拡大を継続する。
- ④ 杏林APラウンドテーブルを継続開催し、SGH指定校・グローバル人材育成取組校等と実質的な連携協議を行い、パートナーとなる高等学校と目的を共有し、協力可能性を把握する。これにより高大接続・連携を強化・拡大する。
- ⑤ 高校生・大学生を対象に、ライティング・プレゼンテーション等の自己表現能力向上のための各種セミナー、プレゼンテーションコンテストを実施し、高校生・大学生の主体的学修意欲を喚起し、留学を契機にしてグローバル人材に成長する学修過程を支援する。
- ⑥ 本事業推進に係る教務的措置の定期的点検を行いながら、ライティングセンターの高校生に対する開放、高校生対象大学教養レベルグローバル関連夏季集中科目等の開講を継続し、グローバル関連科目等の高校生へのオープン化の効率的かつ効果的な事業運営を行う。
- ⑦ 高校生の利益となり新しい高大接続の在り方に沿った本格的なアドバンスドプレイズメントの実現に向け、本学でアドバンスドプレイズメントによって修得した単位の入学後認定を行う協力大学を、首都圏の大学だけでなく地域の拡大を図り、制度の有効性を高める。
- ⑧ 本学で開発した「グローバルルーブリック」は、「学力の三要素」のうち、評価測定が難しい「主体性・多様性・協働性」を指標・項目として取り入れたものである。語学力に関しては、「読む」「聞く」だけでなく「書く」「話す」も含めた四技能を、CAN-DO方式で評価する指標・項目を盛り込んでいる。平成30年度入試において、事業取組学部である外国語学部において、AO入試で選抜方法として使用したことを継続し、具体的選考方法等を全学的な入試概要の発表時に行う。
- ⑨ 本事業のパートナーとなる高等学校（重点連携校）を継続選定し、グローバル人材育成連携協定を締結することにより、平成30年度以降の高大接続体制を整備する。
- ⑩ 「大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会」で本年度の事業実施内容ならびにその評価を総括することにより、年次事業報告書（平成29年度分）を作成し連携高等学校等に送付するとともに、本事業特設サイトでも公開し、広く事業の成果を公表する。
- ⑪ 本事業における教育内容・教育方法・教育成果等に関する発展的連携を推進するミーティングを兼ね、今後の有機的連携に向けた 合同教員研修（FD）を実施し、具体的で実質的な取り組みを策定するための意見交換を行う。
- ⑫ 平成29年度年次報告書をもとに「大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会」（委員長：学長）から選出されたメンバーと「外部評価委員（高等学校関係者、有識者）」において、平成29年度の事業の点検・評価を行い、平成30年度以降の改善策を検討する。
- ⑬ 連携高等学校生徒を対象とする「日英中トライリンガルキャンプ」「英語キャンプ」を実施する。本学外国語学部英語学科、中国語学科、観光交流文化学科在学学生、中国からの留学生もピアサポーターとして参加し、ともにグローバル人材を目指す若者が継続的に協力し合うことができるコミュニティの形成を図る。
- ⑭

杏林大学 H30年度 テーマⅢ(高大接続)  
事業の実施計画・実施内容・実績・成果

⑮ 平成31年度に実施するライティングセンター主催ライティングセミナー、教養グローバル関連科目、日英中トライリンガルキャンプ、英語キャンプ等の各コンテンツを紹介するリーフレットを制作し、高校生・高等学校関係者への周知と参加を促す。

本年度の補助事業実施計画

- ① 4月 アドバンストプレイスメントを継続実施する。
- ② 4月～3月 井の頭キャンパスでのライティングセンターの運営を継続し、留学に向けたサポート体制を強化させる。
- ③ 4月～3月 特設サイトの運営・更新による事業公開を推進し、学内外への事業の周知・波及を図る。
- ④ 4月～3月 大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会、高大接続推進室、ライティングセンターとの連動を継続し、他学部への事業拡大を継続する。
- ⑤ 4月～3月 SGH指定校・グローバル人材育成取組校等との「杏林APラウンドテーブル」を継続開催する。
- ⑥ 4月～3月 高校生・本学学生を対象とした「グローバルAPセミナー」、「ライティングセミナー」、「プレゼンテーションコンテスト」を実施する。
- ⑦ 4月～3月 本事業実施に係る教務的措置の継続、例えば、ライティングセンターと授業の連動や高校生に対する開放、高校生対象大学教養レベルグローバル関連夏季集中科目等の開講を継続し、グローバル関連科目等の高校生へのオープン化を実施する。
- ⑧ 4月～3月 アドバンストプレイスメントの複数大学での実施のために他大学と大学間単位互換協定の拡充を図る。
- ⑨ 5月 教育成果測定に活用する「グローバルルーブリック」の改修を行い、入試選抜方法としてどのように利用するかを公表する。
- ⑩ 5月～3月 グローバル人材育成連携協定新規締結の拡充を図る。
- ⑪ 5月～7月 年次事業報告書（平成29年度分）の作成・印刷・送付を行い、事業の成果を広く公表する。
- ⑫ 7月 本学と連携高等学校合同による教員研修（FD）を実施する。
- ⑬ 7月～9月 「大学教育再生加速プログラム（AP）推進委員会」にて平成29年度の事業について自己点検を行い、第三者評価委員会による点検・評価を受審し、平成30年度以降の改善計画の検討を開始する。
- ⑭ 8月～3月 日英中トライリンガルキャンプ・英語キャンプの実施を通して、高校生へ学修機会を提供する。
- ⑮ 2月～3月 平成31年度に実施するライティングセンター主催ライティングセミナー、教養グローバル関連科目、日英中トライリンガルキャンプ、英語キャンプ等の案内リーフレットの作成・印刷・送付を行う。

補助事業の実績	補助事業に係る具体的な成果
<p>総論(補助対象期間中に行った事業の内容の概要を記載してください。また、必ず、交付申請時の実施計画の総論と対応させるように記載してください。)</p> <p>(1)全体 本補助事業「日英中トライリンガル育成のための高大接続」は、文部科学省が指定したスーパーグローバルハイスクール(SGH)、SGHアソシエイト、あるいは、指定されなかったがグローバル人材育成に積極的に取り組んでいる高等学校との有機的な高大接続を通して、より効率的かつ効果的にグローバル人材育成を加速することを目的としている。母語である日本語に加え、英語・中国語を操るトライリンガルになることは、「世界経済の中核を担っている英語圏・中国語圏に伍する日本社会の未来を築く」ため、そして、「地球上のより多くの人とコミュニケーションを通して世界の発展に寄与する」ために極めて有益であるという、本学のグローバル人材育成が拠って立つ認識を高校生にも普及し、高校生・大学生という立場を超えて、ともにグローバル人材を目指す若者が協力し合いながら意欲・能力を涵養しうる一貫した取組を推進していく。その過程で、「大学による高等学校への学修機会の提供」に加え、本学が学生の成長を促す支援の一環として推奨してきた「ピアサポート」すなわち「大学生(留学生を含む)による高校生への学修機会の提供」も意欲的に実施し、「上級生が主体的に下級生に範を示すことによって自らの人格・能力を磨く」というピアサポートの風土の醸成をより一層加速させていく。高校生・大学生、さらには高等学校・大学の教職員が一体となった包括的な高大接続を積極的に展開することにより、補助期間終了後も持続的かつ自立的に機能しうる体制の構築ならびにノウハウの集積を図る。</p> <p>本学は、理事長・学長の強いリーダーシップのもと、「グローバル人材育成」ならびに地域社会の知的基盤となるべく「社会変革のエンジンとなる大学」「地域から世界へ進化する大学」を目指している。本補助事業は、高大接続の観点から、「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成」という社会の要請に着実に応える教育的基盤の整備・運用の実質化を試みるものであり、将来的には日本における高大接続のモデルケースとなるべく成果を広く波及させることも目指していく。</p> <p>(2)本年度 本補助事業の本年度の目標は、井の頭キャンパスにおける高大接続の継続実施である。平成26年度より3年半をかけて堅調な軌道に乗り始めた「日英中トライリンガル育成のための高大接続」を推進するために、「大学教育再生加速プログラム(AP)推進委員会」(委員長:学長)・「高大接続推進室」・「ライティングセンター」の学内組織と、連携協定締結校(事業開始後、順天高校、関東国際高校、神奈川総合高校、武蔵村山高校、大成高校、日出学園高校の6校追加)をはじめとする高等学校との連携協議の場(「杏林APラウンドテーブル」)を有機的に機能させながら、平成28年度に開設した井の頭キャンパスにおいて、申請計画調書に記載したさまざまな高大接続事業を継続実施する。杏林APラウンドテーブルを継続開催し、そこから得られた協議結果を各事業内容に反映し、補助期間終了後の継続の実施も射程に入れながら、効果的な高大接続事業を進展させていく。また、昨年度より実施し始めた「アドバンストプレイズメント」を本年度も継続実施し、意欲のある高校生に対する学修機会を積極的に提供していく。本学でアドバンストプレイズメントによって修得した単位を30年度以降入学した際に認定する「アドバンストプレイズメントによる大学間単位互換協定」を29年度には桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学と締結したが、連携協定締結大学を増やし高大接続の制度普及を行う。早期留学を可能にするスーパーグローバルクラスの継続的運営、IELTS・TOEFL対策科目、高校生対象・大学教養レベルグローバル関連夏季集中科目の開講、トライリンガル育成のための英語・中国語教育の強化などの教務関連措置をとり事業進捗を図る。トライリンガルキャンプ、英語キャンプなどの「大学生(留学生を含む)による高校生への学修機会の提供」(ピアサポート)等の高大接続事業は継続し、本年度も高校生への学修機会提供を積極的に展開していく。また、高大接続、入試改革に資することを目的として開発を進めてきた、高校での教育成果測定のための「グローバルルーブリック」の運用については、平成30年度入試において事業取組学部である外国語学部では入試選抜方法へ導入したが、本年度も継続実施する。こうした補助事業開始後始めた高大接続事業の継続的運営と、昨年度新たに導入したアドバンストプレイズメント、ルーブリックの入試における利用を継続実施することによって、計画調書に記した高大接続構想が本格的に具現する見込みである。</p>	<p>(学生教育の観点での成果の概要を記載してください。また、必ず、左記の補助事業の内容と対応させるように記載してください。)</p>

平成29年度実施された中間評価において、本学の事業は「A:計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。」との評価を受けた。本事業採択後5年目となる平成30年度は、平成28年度井の頭キャンパス開設により本学の教育・研究機能が三鷹市に集約されたことを契機に、改善されたキャンパスの立地条件を活かし高大連携・高大接続を加速させた。昨年度4月より開始したアドバンスト・プレイズメントを継続実施し、春学期・秋学期合計で事業取組学部である外国語学部の36科目だけでなく、医学部2科目、保健学部4科目、総合政策学部の14科目を含む56科目を対象科目として高校生に開放した。高校生履修者春学期0名となったので、急遽、夏季集中科目として保健学部4科目、総合政策学部1科目、外国語科目1科目を開講し、さらに英語キャンプ・中国語研修を加え、高校生履修登録者114名、高校生単位認定数123単位と目標を達成した。昨年度、桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・プレイズメントに関する単位互換協定」を締結したが、修得した単位がより多くの大学で単位認定される高校生にとってより有益な制度構築を図るため、複数の大学に協定締結の働きかけをした。ライティングセンターの稼働を通じて学生の留学準備の補助機能を強化するとともに、各種学内イベントの高校生への開放や大学全体への事業の波及、それによる各学部教員と高等学校との連携機会の増加を通じて、大学の教育資源をさらに広範囲にわたって高校生に提供した。杏林APラウンドテーブルの継続的開催を通じ、本事業の取組に対する高等学校側からのフィードバックを得る機会を設け、教育効果の向上のための意見交換を定期的に実施した。学内では第三者評価委員会を開催することで、事業の目的・計画の妥当性や事業の進捗・達成状況の点検・評価を行い、課題を客観的な視点から分析し、各種事業の計画・実効性の改善を目指した。高校生への本学が有する教育資源の開放という観点から、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」を実施し、さらに、各種教育イベントの提供という観点からは、高校生と大学生が共に学修する場である「IELTS対策講座」や「日英中トライリンガルキャンプ」の継続実施に加え、昨年度に引き続き「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ・吹替コンテスト」に高校生の参加を呼びかけ、目的を共有する者が集う場での集中特訓や能動的学修を通じて、高大の参加者に対し留学に向けた強い意識の醸成を促した。高大接続改革の入試改革として、学力の3要素のうち「主体性を持ち多様な人々と協働しつつ学習する態度」を多面的評価するために開発したルーブリックを、昨年度と同様に、平成31年度外国語学部AO入試Ⅱ期(グローバル型)で選抜方法の一部として使用した。

・全学的アドバンスト・プレイズメントによって、大学入学前に様々な学問分野での大学教養レベルの教育を受ける機会が与えられ、医学部、保健学部、総合政策学部、外国語学部の大学生と共に学ぶことができるようになった。  
 ・夏季集中科目と英語キャンプ・中国語研修を開講することによって、高校生が履修しやすい環境が整い、114名の高校生が履修登録をし、123単位をアドバンスト・プレイズメントで単位認定した。  
 ・桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・プレイズメントに関する単位互換協定」を締結したことによって、本学入学志望の高校生だけでなく、アドバンスト・プレイズメントによって修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度となった。  
 ・井の頭キャンパス開設に伴う教育・研究機能の集約によって、高校生にとって大学での教育機会やイベント参加、図書館・ライティングセンター・英語・中国語サロンなどの教育環境を利用しやすくなった。  
 ・前年度より引き続き、ピアチューターならびに英語授業担当者の協力を得てライティングセンターの周知を徹底したことで、利用者数・利用回数・稼働率を維持し、留学準備の補助に大きく貢献した。  
 ・ライティングセンター主催の各種セミナー・ワークショップを通じて、高校生と大学生が共に学びあうことによって、高大接続した形でグローバル人材に成長しようとする意識の醸成と具体的技術・能力向上が図られた。  
 ・全学的波及を通じ、外国語学部以外の教員と高校との連携機会が増加したことで、高校生が語学以外の分野でも「グローバル人材」として身に付けるべき素養や知識について大学の教育資源を活用できるようになった。  
 ・杏林APラウンドテーブルを通じて、大学教職員と高校教職員がグローバル人材育成の課題や高大接続改革への対応状況についての意見交換を行い、大学生・高校生の学びの質の向上に繋がった。  
 ・「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」の開講や「グローバル関連科目」「COC関連科目」の高校生への開放を通じて、大学レベルの講義に高校生と大学生が共に参加し、高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ能動的学修に従事する理想的な学びの空間が実現した。  
 ・「英語キャンプ」「日英中トライリンガルキャンプ」「IELTS対策講座」等に加え「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ・吹替コンテスト」を高校生に開放したことで、国際的な活躍に向け高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。  
 ・学力の3要素のうち、知識・技能、思考力・判断力・表現力などの試験・テストで測ることができる力とは異なり、主体性・多様性・協働性という様々な経験によって身に着けた能力を評価測定するルーブリックが入学試験の一部として使用されることにより、授業及び高等学校が行事として指定している経験だけでなく、学校が指定していない留学・海外研修、ボランティア、資格・検定試験、コンテストなどの学外での自主的な経験によって習得した能力が多面的に評価され、大学に進学してそれらの生きる力を伸ばそうとするきっかけが得られた。

(補助対象期間中に行った事業の内容を具体的に記載してください。また、必ず、交付申請時の実施計画と対応させるよう、箇条書きで記載してください。)

(学生教育の観点での成果を記載してください。また、必ず、左記の補助事業の内容と対応させるよう、箇条書きで記載してください。)

① 4月 アドバンストプレイズメントを継続実施する。

昨年度までに締結した大成高校、順天高校（SGH指定校）、神奈川総合高校、関東国際高校、聖徳学園高校、武蔵村山高校、調布南高校、府中東高校、藤村女子高校の9高校と「アドバンスト・ブレイスメントに関する覚書」を継続維持し、学則・規定等を整え、医学部2科目、保健学部4科目、総合政策学部14科目、外国語学部36科目の春学期・秋学期合計56科目を対象科目としてアドバンスト・ブレイスメントを継続実施した。春学期開講科目の受講を希望する高校生履修登録者が0名となったため、急遽、夏季集中科目の開講を年度内に決定し、保健学部4科目（基礎生物学・基礎化学・基礎物理学・基礎数学）、総合政策学部1科目（近現代史と現代社会）、外国語学部1科目（目的別英語演習）を開講したところ、計114名の高校生が履修し、123単位がアドバンスト・ブレイスメントとして認定された。

3月に実施された日英中トライリンガルキャンプには高校生29名が参加し、口語中国語の科目として29単位をアドバンスト・ブレイスメントで認定した。本年度中にアドバンスト・ブレイスメントで単位認定を受けた高校生は合計128名、認定された単位数は152単位となり、目標値50名、100単位を上回る結果となった。

桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・ブレイスメントに関する単位互換協定」を締結し、本学入学志望の高校生だけを対象にせず、制度本来の意義を踏まえ、修得した単位がより多くの大学で単位認定される高校生にとってより有益な制度構築を図っており、本年度は複数の大学に働きかけを行っているが、先方の大学から正式な協定締結の回答を待っている状況である。

・全学的アドバンスト・ブレイスメントによって、大学入学前に様々な学問分野での大学教養レベルの教育を受ける機会が与えられ、医学部、保健学部、総合政策学部、外国語学部の大学生と共に学ぶことができるようになった。これは高校生にとって自分の進路を決めるきっかけとなるだけでなく、大学進学後に修得すべき単位が先取りできるようになり、大学での学修がより深く実質的なものに行えるようになった。さらには将来的には本事業の目的でもあるグローバル人材育成のための留学の早期化・長期化にもつながることになる。

・春学期・秋学期の正規開講科目をアドバンスト・ブレイスメントの対象科目として開放しているが、高校生の高校での授業時間割の自由度が低く、通常科目を履修しづらい状況にあることが判明したため、夏季集中科目を8月13日から30日の間に開講したところ、114名の履修登録がされ、99名が単位認定された。また、春季休業中3月23日・24日に実施されたトライリンガルキャンプに参加した29名も単位認定を受けた。

・桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・ブレイスメントに関する単位互換協定」を締結したことによって、本学入学志望の高校生だけでなく、アドバンスト・ブレイスメントによって修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度となった。

② 4月～3月 井の頭キャンパスでのライティングセンターの運営を継続し、留学に向けたサポート体制を強化させる。

井の頭キャンパス移転と同時に移設したライティングセンターが本年度も継続的に稼働し、ジュノン・サマービル特任講師によるワークショップで訓練を受けた大学生9名がピアチューターとして、大学生ならびに高校生の英語ライティングをサポートする体制が整った。

ライティングセンターと授業の連動に関して、平成27年度より継続して、特に外国語学部設置科目の中でライティングを扱う科目を選定し、科目担当者に授業の中でライティングセンターの積極的利用を学生に奨励すること、授業の課題作成補助としてライティングセンターの利用斡旋を依頼した。

2018年6月9日、高校生対象英検対策ライティングセミナーが開催され、2名の高校生が参加した。

本学のオープンキャンパスで高校生対象ライティングセミナーがライティングセンターで開催され、6月16日に12名、7月28日は18名、8月4日は6名、8月18日は14名、8月19日は7名の合計57名の高校生がライティングセンターで特任講師・大学生ピアチューターのライティング指導を受けた。

2018年7月13日、実用英語Ⅰの授業内で、ライティングセンター特任講師が英文ライティングワークショップを開催し、杏林大学生87名が受講した。

2018年10月23日・30日の英語作文の授業内で、ライティングセンター特任講師が英文パラグラフ構造に関する指導を行い、合計68名の杏林大学生が受講した。

2018年11月17日に高校生対象のライティングセミナーが開催され、6名の高校生が特任講師や大学生ピアチューターの指導を受けた。

2018年11月21日、11月28日、12月5日の3週にわたり「プレゼンスキル・ワークショップ」が開催され、延べ3名の大学生がBig Padや関連するインターネット機器を用いた英語でのプレゼンテーションの技術の向上に取り組んだ。

2019年3月7日、保健学部主催南カリフォルニア大学研修の事前研修として、プレゼンスキル・ワークショップが開催され、14名の研修参加予定の学生が参加した。

2018年9月～2019年3月 2019年度のピアチューターの募集を開始し、書類審査ならびに面接を行って、候補者を決定した。内定した候補者はライティングセンターの活動を見学した。

・特任講師ならびにピアチューターから個別の指導を受けることで、訪問した学生は英語における自身の長所と短所を見極めることができ、英語ライティング学習に対するより積極的な姿勢が生まれた。

・ライティングセンターのスタッフと英語授業を担当する教員たちの間で協力、調整が行われたことで、指導を受けた学生は英語授業とライティングセンターの活動が相補的であるという認識を強くし、英語ライティング向上に向けてさらに意欲を高めることとなった。また、継続してライティングセンターの活用を促したことで、ライティングセンターを訪問した学生数・実施した個人チューターセッション回数ともに、センターの稼働率を高水準で維持することに成功した。

・ライティングセンターの在学生利用者数は年間432名にのぼり、実質稼働月数7か月として月平均62名が利用した。高校生利用者数は年間81名にのぼり、目標値の30名を大きく上回った。

・特任講師・大学生ピアチューターによる「英語ライティング・ワークショップ」「ライティングセミナー」のライティング力だけでなく、「プレゼンスキル・ワークショップ」の英語での情報発信力を向上させることを目的とした取組によって、現代社会における英語での情報発信力の必要性が認識され、国際舞台で活躍を志す学生の刺激を与えることができた。

・ピアチューター主導のレビューレッスンは、大学生のみならず、セミナーやオープンキャンパスで大学を訪れていた高校生にも開放され、高校生が語学学習の意欲を高める契機となった。

・「ライティングセミナー」では、参加高校生はピアチューターから個別指導を受けることで客観的に自身のライティングを見つめなおす機会を得た。また、ピアチューターとして参加した大学生側も国際的な諸問題に高い関心を持つ高校生に刺激を受けつつ、ディスカッションを通じ、ライティングの基本を改めて確認するとともに指導に対するさらなる自信を深めた。

・グローバル人材育成が外国語学部だけではなく全学的に波及し、海外研修や留学に参加する学生が保健学部・医学部・総合政策学部でも増加してきている。ライティングセンターで海外研修や留学の事前研修を受けることによって、留学先での学習にスムーズに入れるようにすることで、グローバル人材育成を加速させることができた。

・2019年度に向けて早期より次年度ピアチューターの募集、採用活動を行ったことで、次年度への引継ぎがスムーズとなり、2018年度の活動を停滞させることなくそのまま維持することが可能となる。

③ 4月～3月 特設サイトの運営・更新による事業公開を推進し、学内外への事業の周知・波及を図る。

・2018年7月25日に実施した「第5回高校と大学をつなぐFD/SD」では、早稲田大学入学センター副センター長、入試開発オフィス長の沖清豪教授が、「学生の変容からみた高大接続改革の意義と課題」という演題で講演し、高校教員3名、杏林大学教職員84名が参加した。

・2018年8月6日・7日に夏期休暇を活用して実施した「英語キャンプ」では、22名の大学生と11名の高校生、1名の聴講生の合計34名が参加し、大学生と高校生が英語の集中特訓に取り組んだ。

<p>2018年4月～2019年3月 特設サイトを通じて、杏林APラウンドテーブルなどの大学と高等学校の会合、ライティングセンターの活動や、高校生にも開放した「英語キャンプ」、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」、「英語プレゼンテーションコンテスト」、「中国語カラオケ・吹替大会」、「IELTS対策講座」などの教育的イベント、高等学校教員と大学教員の教育に関する情報交換を目的とした「高校と大学をつなぐFD/SD」、高校生と大学生の交流・協働学修をテーマとした「日英中トライリンガルキャンプ」などの活動について、継続的に発信を行った。</p> <p>2018年4月～2019年3月 医学部・保健学部・総合政策学部・外国語学部の教員による高校生への特別指導や高等学校訪問講義についても継続的に発信し、大学全体としての取組の実績を強調した。</p>	<p>・8月の夏期休暇を活用して実施した「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」では、昨年度は3科目であったが今年度は保健学部の1科目を加え4科目開講された。合計14名の高校生が参加し、合計70名の大学生に交じって受講した。さらには、高校生を対象とした夏季集中アドバンスト・プレイズメント科目として6科目追加開講し、86名の高校生が受講した。</p> <p>・2018年10月6日に実施した「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ大会・同時通訳パフォーマンス大会」では「英語プレゼンテーションコンテスト」に高校生6名、大学生6名を含む25名が参加、「中国語カラオケ・同時通訳パフォーマンス大会」には大学生34名、留学生8名を含む90名が参加し、国際的な活躍に向け高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。</p> <p>・2019年2月9日・16日に2週連続で実施した「IELTS対策講座」では、3名の杏林大学生に高校生11名が加わり、留学に向けて高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。</p> <p>・2019年3月23日・24日に実施した「日英中トライリンガルキャンプ」では合計29名の高校生が参加し、英語や中国語を通じた留学生との交流、及び、大学生との協働学修、アクティブラーニングに取り組み、その成果をコンテスト形式でプレゼンテーションする学修に取り組んだ。</p> <p>・総合政策学部、外国語学部教員による順天高校での講演、医学部細胞生理学教室教員による聖徳学園高校の生徒の指導、保健学部看護学科学学校看護学研究室教員による聖徳学園高校のいじめ防止活動の支援、国際交流センター長の関東国際高校での海外研修報告会への参加など、学制的に個別教員と高等学校との連携が継続的に行われており、大学の持つ教育資源をより広範囲にわたって高校側に提供することができている。</p>
<p>④ 4月～3月 大学教育再生加速プログラム(AP)推進委員会、高大接続推進室、ライティングセンターとの連動を継続し、他学部への事業拡大を継続する。</p>	<p>・本補助事業で定期的に行っている事業項目以外にも、総合政策学部教員による順天高等学校での講演、医学部細胞生理学教室教員による聖徳学園高等学校の生徒の指導、保健学部看護学科学学校看護学研究室教員による聖徳学園高等学校のいじめ防止活動の支援、さらに、「大学教養レベル・グローバル関連科目の夏季集中講座」における総合政策学部教員の担当科目の開講など、他学部教員と高校との連携機会の拡大にも結びついた。</p> <p>・アドバンスト・プレイズメントの実施にあたり、春学期が履修登録者0名との結果を受けて、AP推進委員会の委員長でもある学長の指揮のもと、夏季集中アドバンスト・プレイズメント科目6科目を開講したことは、学長のガバナンスが発揮された証左である。</p>
<p>⑤ 4月～3月 SGH指定校・グローバル人材育成取組校等との「杏林APラウンドテーブル」を継続開催する。</p>	<p>・第12回杏林APラウンドテーブルにおいては、アドバンストプレイズメントの高校生・保護者向けの説明会を開けば参加者も増えるのではないかと示唆を受け、各種の学修イベントとセットでPRに力を入れていくことを確認した。また、APの科目数が多いことが良いのかとの意見があり、高校生がほんとは参加したくなるような少数の科目に絞って多くの高校生を集めることでも良いのではないかと意見があり、次年度の科目選定に配慮することになった。さらに、夏季集中講座などに参加した高校生の学修評価をしてもらえるのかとの質問があり、今後、高校の調査書(ポートフォリオ)が変わり、こうした校外学習などを自己申告して記載していけるようになるにあたり、評価がしっかりしていることが重要となることを踏まえ、高校生に単位を与える学習機会に関しては、大学生と同基準で評価することを確認した。</p> <p>・第13回杏林APラウンドテーブルにおいては、高大接続・入試改革に対する高校側の対応についての情報を得た。英語4技能の強化や、英検、TEAP、GTEC、ケンブリッジ英検、TOIEC、IELTSなどの受検を課している。ポートフォリオ対応として、多くの高校でClassiを導入または検討している。アクティブラーニングを積極的に行い、50分授業の内、教員が話をするのは20分以下にしようとしている。新学習指導要領の研究・研修を学校全体で行おうとしているが、教員間の温度差がある。学力観が変わる中で、どのような人材を育ててゆくのかという根本を教員が共有してゆくことが重要である。探究的学習や課題研究については、総合高校のほうに実績があるが、杏林大学を含め大学での実験などを活用している。ただ、若い教員の中には、自身の卒論経験がない人もいて、指導が困難になる場合もある。調査書やポートフォリオの入試での大学側の活用の方針が良く見えないのは問題である。共通テストを受ける一般入試より、現在の指定校推薦、公募推薦、AOで受験する生徒が多いので、多様な進路選択をする生徒に対して入試改革に対応するのが大変である、などの貴重な情報を得た。さらに、「大学のアドミッションポリシーが出てこないのが問題で、アドミッションオフィサーを置く個別の良い生徒を探してゆく入試に移行する気配がない」との指摘に対し本学学長は、「アドミッションポリシーは既にどの大学でも出しているが短い。杏林大学では高大接続の観点から、きめ細かい長い文章で書いており、状況に応じて修正もしている」と回答した。</p>
<p>⑥ 4月～3月 高校生・本学学生を対象とした「グローバルAPセミナー」、「ライティングセミナー」、「プレゼンテーションコンテスト」を実施する。</p>	<p>・工学院大学附属高校における外国語学部教員によるグローバルAPセミナーでは、日常的にオールイングリッシュで授業を受けている高校1年生を対象に、社会言語学・コミュニケーション論の研究成果をもとに、よりプラクティカルな英語学習、そして「語彙と文法の隙間」を取り持つ「コミュニケー</p>

<p>2019年10月13日、工学院大学附属高校において、外国語学部教員がグローバルAPセミナーとして講演。高校生44名と高校教員2名が参加。</p> <p>2019年10月13日、工学院大学附属高校において、保健学部教員がグローバルAPセミナーとして講演。タイトルは、「映画で学ぶ 診療放射線技師の世界『ハリー・ポッターと賢者の石』より」で、高校生32名、高校教員2名が参加。</p> <p>順天高校主催のグローバルウィークにおいて、10月31日はライティングセンター特任講師と総合政策学部教員が、11月1日は国際交流センター長が講演を行い、それぞれ高校生26名、13名、12名、計51名、高校教員4名、4名、4名、計12名が参加した。</p> <p>2018年6月9日、高校生対象英検対策ライティングセミナーが開催され、2名の高校生が参加した。</p> <p>本学のオープンキャンパスで高校生対象ライティングセミナーがライティングセンターで開催され、6月16日に12名、7月28日は18名、8月4日は6名、8月18日は14名、8月19日は7名の合計57名の高校生がライティングセンターで特任講師・大学生ピアチューターのライティング指導を受けた。</p> <p>2018年7月13日、実用英語Ⅰの授業内で、ライティングセンター特任講師が英文ライティングワークショップを開催し、杏林大学生87名が受講した。</p> <p>2018年11月17日に高校生対象のライティングセミナーが開催され、6名の高校生が特任講師や大学生ピアチューターの指導を受けた。</p> <p>2018年11月21日、11月28日、12月5日の3週にわたり「プレゼンスキル・ワークショップ」が開催され、延べ3名の大学生がBig Padや関連するインターネット機器を用いた英語でのプレゼンテーションの技術の向上に取り組んだ。</p> <p>2019年3月7日、保健学部主催南カリフォルニア大学研修の事前研修として、プレゼンスキル・ワークショップが開催され、14名の研修参加予定の学生が参加した。</p> <p>2018年10月6日に実施した「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ大会・同時通訳パフォーマンス大会」では「英語プレゼンテーションコンテスト」に高校生6名、大学生6名を含む25名が参加、「中国語カラオケ・同時通訳パフォーマンス大会」には大学生34名、留学生8名を含む90名が参加。</p> <p>2019年3月23日・24日の日英中トライリンガルキャンプで行われた「プレゼンテーションコンテスト」には、高校生29名、大学生11名が参加。</p>	<p>シヨンの作法)のような視点から継続的で効果的な英語学習のコツを提供し、グローバル人材育成につながることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・工学院大学附属高校における保健学部教員によるグローバルAPセミナーでは、「ハリーポッター」シリーズに登場するケガのシーンを題材に、エックス線撮影をはじめとした画像検査、ケガの原理や骨に関する雑学など専門的な話を含めて解説し、受傷機転(ケガのきっかけ)からの結果考察や、患者の年齢や性別による違いについて高校生が考える機会となった。</li> <li>・順天高校主催のグローバルウィークは、先方がSGH、本学がAPで採択されて以来、全面協力して開催される行事であるが、今年度も本学から3名の教員を派遣してグローバル人材育成を支援することができた。ライティングセンター特任講師「Student interaction in English using smartphone apps」、総合政策学部教員は「Is technology killing (traditional) culture?」、国際交流センター長は「Gulliver in Japan」というテーマで講演を行い、高等教育における教育機会を提供することができた。</li> <li>・特任講師・大学生ピアチューターによる「英語ライティング・ワークショップ」「ライティングセミナー」のライティング力だけでなく、「プレゼンスキル・ワークショップ」の英語での情報発信力を向上させることを目的とした取組によって、現代社会における英語での情報発信力の必要性が認識され、国際舞台で活躍を志す学生の刺激を与えることができた。</li> <li>・ピアチューター主導のレビューレッスンは、大学生のみならず、セミナーやオープンキャンパスで大学を訪れていた高校生にも開放され、高校生が語学学習の意欲を高める契機となった。</li> <li>・「ライティングセミナー」では、参加高校生はピアチューターから個別指導を受けることで客観的に自身のライティングを見つめなおす機会を得た。また、ピアチューターとして参加した大学生側も国際的な諸問題に高い関心を持つ高校生に刺激を受けつつ、ディスカッションを通じ、ライティングの基本を改めて確認するとともに指導に対するさらなる自信を深めた。</li> <li>・特任講師による「英語ライティング・ワークショップ」のライティング力だけでなく、「プレゼンスキル・ワークショップ」の英語での情報発信力を向上させることを目的とした取組によって、現代社会における英語での情報発信力の必要性が認識され、国際舞台で活躍を志す学生の刺激を与えることができた。</li> <li>・「英語プレゼンテーションコンテスト」「中国語カラオケ大会・同時通訳パフォーマンス大会」では、国際的な活躍に向け高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ学びに従事する理想的な環境が実現した。</li> <li>・日英中トライリンガルキャンプにおける「プレゼンテーションコンテスト」では、「チャイナインノベーション」というテーマのもと、1つのプレゼンで日英中の3言語で構成するという課題に取り組み、3言語の有用性を確認する機会となった。</li> </ul>
<p>⑦ 4月～3月 本事業実施に係る教務的措置の継続、例えば、ライティングセンターと授業の連動や高校生に対する開放、高校生対象大学教養レベルグローバル関連夏季集中科目等の開講を継続し、グローバル関連科目等の高校生へのオープン化を実施する。</p> <p>大学教養レベルグローバル関連夏季集中科目を本年度は下記4科目を高校生に開放。総計で高校生14名、大学生70名が履修した。</p> <p>2018年8月20日、21日 科目A 口語中国語(外国語学部) 参加高校生3名、在学生40名。</p> <p>2018年8月22日、23日 科目B 英語をとりまく多彩な学問(外国語学部) 参加高校生8名、在学生26名。</p> <p>2018年8月24日、25日 科目C 英語と日本語でまなぶ「社会のしくみ」入門(総合政策学部)参加高校生1名、在学生3名。</p> <p>2018年8月27日 科目D 感染症を巡る諸問題とその対策(保健学部)参加高校生2名、在学生1名</p> <p>2018年4月～2019年3月 グローバル関連科目37科目、COC関連科目12科目を開講し、それぞれ、延べで2,838人、1,051人の在学生受講者があった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「口語中国語」では、中国語ネイティブ教員の指導の下、午前中は3クラスに分かれて会話表現や中国語検定対策などそれぞれのレベルに合わせた内容を学んだ。午後には中国人留学生が加わり、発音指導や異文化交流を楽しみながら会話練習などを行った。</li> <li>・「英語を取り巻く多彩な学問」では、外国語学部に所属する8人の教員から、英語の歴史や英日の発音アクセントの違い、翻訳実務の内幕、英語と観光の関係、さらにはアニメ映画の字幕の工夫にいたるまで、多岐にわたる講義を受講し大学での多彩な学問領域に触れる機会を得た。</li> <li>・「英語と日本語で学ぶ「社会のしくみ」入門」では、社会科学系の学問への入門として、英語と日本語を通して、グローバルに見る視点の素地を身に着ける機会となった。</li> <li>・「感染症をめぐる諸問題とその対策」では、地球規模で重要となる感染症について、高校生が在学生と共に学び、視野が広がる有意義な学修となった。</li> <li>・多くの在学生がグローバル関連科目やCOC関連科目で学修することによって、杏林大学の目指すグローバル人材育成と地域指向の双方の視点から、さまざまな学修内容を多角的に学ぶ機会となった。</li> </ul>
<p>⑧ 4月～3月 アドバンストプレイズメントの複数大学での実施のために他大学と大学間単位互換協定の拡充を図る。</p> <p>2017年3月に桜美林大学、5月に共愛学園前橋国際大学、9月に創価大学と「アドバンストプレイズメントに関する単位互換協定」を締結し、以後この連携4大学でアドバンスト・プレイズメントの単位互換を実施していくことになった。2018年度も複数の大学に働きかけを継続して行っており、武蔵野大学から問い合わせがあった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・桜美林大学、共愛学園前橋国際大学、創価大学の3大学と「アドバンスト・プレイズメントに関する単位互換協定」を締結したことによって、本学入学志望の高校生だけでなく、アドバンスト・プレイズメントによって修得した単位がより多くの大学で単位認定される、高校生にとってより有益な制度となった。</li> </ul>
<p>⑨ 5月 教育成果測定に活用する「グローバルルーブリック」の改修を行い、入試選抜方法としてどのように利用するかを公表する。</p> <p>2018年5月 学力の3要素のうちの一つ「主体性も持って多様な人々と協働して学ぶ力」と、「課題発見とその解決をする力」および「語学力(話す力(対話力+プレゼンテーション力)、聞く力、書く力、読む力)」に関するルーブリックを作成し、HP上で公開。同時に、平成31年度外国語学部AO入試第Ⅱ期(グローバル型)でルーブリック・小論文による事前資格審査、ルーブリックに基づくプレゼンテーションを含む面接によって選考を行うことを公表。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学力の3要素のうち、知識・技能、思考力・判断力・表現力などの試験・テストで測ることができる力とは異なり、主体性・多様性・協働性という様々な経験によって身に着けた能力を評価測定するルーブリックが入学試験の一部として使用されることにより、授業及び高等学校が行事として指定している経験だけでなく、学校が指定していない留学・海外研修、ボランティア、資格・検定試験、コンテストなどの学外での自主的な経験によって習得した能力が多面的に評価され、それらの「生きる力」を伸ばすために大学進学を目指す高校生を選抜する入試が実施された。</li> <li>・導入2年目であり、選考日を12月15日にした影響からか、外国語学部全体の募集人員10名に対し、志願者15名、合格者6名という結果となった。</li> </ul>

<p>⑩ 5月～3月 グローバル人材育成連携協定新規締結の拡充を図る。</p> <p>2018年11月14日 杏林大学井の頭キャンパスにおいて都立調布南高校と高大連携協定を締結し、今後も連携を深めていくことを確認した。</p>	<p>・都立調布南高校は、「至誠、創造、力行」を建学の志に掲げ、英語教育に力を注いでおり、杏林APラウンドテーブルにも以前より出席。現在、本学国際交流センター長が同校の学校運営連絡協議会委員になっており、本学の教員が出張講義等を頻繁に実施しており、今後さらに深い様々な高大連携を実施していくことで双方の同意が得られ、この協定締結に至った。協定では、「杏林大学と都立調布南高等学校が、相互の教育に係る交流・連携を通じて、高校生の視野を広げ、進路に対する意識や学習意欲を高めるとともに、大学の求める学生像及び教育内容への理解を深め、かつ高校教育・大学教育の活性化を図るために、次のとおり協定を締結する」とし、以下の活動に取り組んでいくことにしている。</p> <p>(1)大学の授業科目への特別聴講生の受け入れ  (2)大学の各種公開講座への聴講生の受け入れ  (3)大学教員による高校への出張講義  (4)教育についての情報交換及び交流  (5)その他、双方が協議し同意した事項</p>
<p>⑪ 5月～7月 年次事業報告書(平成29年度分)の作成・印刷・送付を行い、事業の成果を広く公表する。</p> <p>2018年5月～7月 事業報告書(平成30年度分)が完成し、特設サイトで公開するとともに、外国語学部・総合政策学部の専任教員、医学部・保健学部の全教授に1部ずつ配布した。また、連携高等学校、愛知県から北海道までのSGH校、AP事業採択大学に送付した。</p>	<p>・広く杏林大学のAP事業の取組を大学の内外に周知することで、学内では、外国語学部だけでなく、医学部・保健学部・総合政策学部の教員による高校生への特別指導や高等学校訪問講義などが継続して行われていることについて情報共有がなされると同時に、杏林大学の本事業の取組の学外での認知度も大いに向上した。</p>
<p>⑫ 7月 本学と連携高等学校合同による教員研修(FD)を実施する。</p> <p>2018年7月25日 「第5回 高校と大学をつなぐFD/SD」を杏林大学井の頭キャンパスで開催した。講師は、早稲田大学入学センター副センター長、入試開発オフィス長沖清豪教授で、演題は「学生の変容からみた高大接続改革の意義と課題」で、高校教員3名、杏林大学教職員84名が参加。</p>	<p>・入試改革での選抜制度の変更は、大学から高校へのメッセージであり、学力の3要素を測る方法、英語4技能(民間試験)の導入、基礎学力テストと大学入学共通テストの利用方法、調査書変更やe-Portfolio導入による高校教員の負担など、数々の具体的論点について解説が行われた。</p> <p>・学生の変容からみれば、M.トロウのエリート型学生、マス型学生、ユニバーサル型学生の3分類は、学生像の変化を言い当てており、それに対応して、国立大・高選抜性私大、中選抜性私大、低選抜性私大のそれぞれにおいて、基礎学力テストや大学入学共通テストの利用方法と科目数などを各大学が決めてゆくことになると説明があった。CEFRに基づく英語4技能試験は到達度を見る試験となり選抜には使えず、実質的には4教科による選抜と英語4技能の到達度で評価することになると指摘。また、学力の3要素を評価するために、学力担保型のAO入試が中堅大学では求められていくとの説明があり、今後の本学の入試改革に対して全学の教員が考える貴重な機会となった。</p>
<p>⑬ 7月～9月 「大学教育再生加速プログラム(AP)推進委員会」にて平成29年度の事業について自己点検を行い、第三者評価委員会による点検・評価を受審し、平成30年度以降の改善計画の検討を開始する。</p> <p>2018年9月29日 杏林大学井の頭キャンパスにおいて、3人の外部評価委員として、中学・高等学校の校長(高校教育全般)、大学教授(英語関係)、高校教諭(中国語関係)を招いて大学教育再生加速プログラム(AP)テーマⅢ(高大接続)の第三者評価委員会を開催した。H29年9月 AP推進委員会にて第三者評価書が共有され、外部評価委員より受けた指摘や批判に基づき、具体的な改善案の検討が行われた。</p>	<p>・高大接続の意義は、入試改革と高校・大学の三位一体の改革とされているが、その理由や目的がはっきりしていない部分もあり、小・中・(高)の教育が先行して変わる中で、入試と大学が変わらなければならないという理解をしている。今では知識はPCとネットで簡単に手に入れることができるので、情報の応用・分析や創造性の育成が大学に課された教育課題であろうとの指摘を受けた。</p> <p>・2017年度では、AP(アドバンストプレイズメント)の実施とルーブリックの入試での活用が大きな成果である。また、中間評価でA評価を受けた点も評価できる。その過程で杏林APラウンドテーブルや大学との連携もでき、組織的な展開がみられている。今後1年半の事業のさらなる展開が期待できるが、補助期間終了後の継続も視野に入れてほしいとの評価を受け、指摘された課題について今後検討していく良い機会となった。</p>
<p>⑭ 8月～3月 日英中トライリンガルキャンプ・英語キャンプの実施を通して、高校生へ学修機会を提供する。</p> <p>2018年8月6日、7日、杏林大学井の頭キャンパスにおいて英語キャンプを実施。22名の大学生と11名の高校生が参加し、英語の集中訓練が行われた。</p> <p>2019年3月23日、24日の1泊2日で、「日英中トライリンガルキャンプ」を多摩永山情報教育センターで実施。本学在学学生11名(チューターとして参加、うち1名は留学生)、本学教職員9名、高校生29名が参加して、大学生や中国からの留学生とともに協働学修、アクティブラーニングに取り組んだ。</p>	<p>・「英語キャンプ」では、ネイティブ教員主導の下、日本語を一切使用しない環境の中で、高い意識を共有する高大の学習者が互いに刺激を与えつつ語学力を向上させ、異文化理解を深めた。</p> <p>・「日英中トライリンガルキャンプ」では、高校生29名に加え、留学生1名を含む大学生11名が参加し、「チャイナ・イノベーション」というテーマのもと、中国語や英語を用いた活動に従事した。高校生ならびに大学生が国際語としての英語・中国語を活用しながら、中国の近年の発展を中国留学経験者である大学生が紹介し、「キャッシュレス事情」、「デリバリー」、「ネットショッピング」、「タクシーの配車アプリ」、「交通事情」というテーマについてグループワークを行った。2日目にはコンテスト形式で、グループワークの成果を、日本語、英語、中国語の3か国語を用いてプレゼンテーションを行った。トライリンガルになること、留学経験を積み異文化を体験することの重要性を、高校生、大学生が共に学ぶ良い機会となった。</p>
<p>⑮ 2月～3月 平成31年度に実施するライティングセンター主催ライティングセミナー、教養グローバル関連科目、日英中トライリンガルキャンプ、英語キャンプ等の案内リーフレットの作成・印刷・送付を行う。</p> <p>2019年1月 2019年度に実施するイベント案内のリーフレット作成について制作会社と打ち合わせを行い、各イベントのスケジュールを確定した。2019年2月 校正を行いイベント案内のリーフレットが完成した。連携校、SGH校、AP採択大学に送付した。</p>	<p>・本リーフレットの作成・印刷・送付(配布)により、2019年度の本事業の予定について重点連携校に周知徹底を図るとともに、2019年度の本学新入学生に対し本事業の概要及び主要プログラムの具体的内容について入学段階から明確に提示することが可能となる。</p>

(注)交付申請書の「補助事業の目的・必要性」、「本年度の補助事業実施計画」と対応させて分かり易く記入すること。